

## 国内研修を終えて

8月22日から28日まで島根県隠岐にある中ノ島の海士町というところで島前合宿を行った。去年も訪れたので2年連続になる。そもそも、私がこの島前合宿に参加したのは去年の感動が忘れられないからである。私は去年、夏休みの期間を利用して何かできないかと模索していた。なかなか1人で行動する勇気もなく、同じ学部同じ学科がいる島前合宿なら参加できるなと思い参加した。私はもともと田舎出身であるため緑や自然がいっぱいある風景には慣れていたが、島前の景色は格別であった。海と山両方があるのでお魚もお肉も自然も想像以上に感動した。一年経ったのち今年私たちが企画をして島前合宿を行うことになった。なかなか、メンバーも集まらず今年引っ張っていく2年生が私を含めて4人だったのでとても不安になった。毎日のように昼休み集まりどうするかを話し合った。去年行ったことのない場所も今年行ってみようということになり、新しい場所を探し、アポを取るといのは大変だった。そんなに大変な思いまでしてこの合宿をやる意味はあるのか。と疑問に思うことも多々あり、途中で投げ出したいと思った。しかし、去年私が感じた感動を今年来てもらって一年生にも感じて欲しい、島の魅力を身体で感じて欲しいと思うと途中でやめることなく続けていけた。旅行をするだけでなく中学生で出前授業をしたり、福祉施設に行ったりと目的のある合宿にしたいと思うとなかなか企画者の負担が大きかった。

島根県まで夜行バスを使い、フェリーに乗って隠岐諸島の島前に向かった。とても懐かしい感じがした。着いたらまず、みんなとの交流を深めるためにバーベキューを開催した。14人ほどだったがたくさんのお肉を食べて満足した。翌日は1日観光をした。島前には3つの島がありそれぞれを中ノ島、西ノ島、知夫島である。私は初めて知夫島に行った。天気も良くて展望台に行ったり島の中を歩いたりした。お昼は知夫島にある自然食ランチを食べた。海があり海の幸がたくさんとれる島前だから、ブランド牛で隠岐牛というものがある。私は、サザエコロッケをいただいた。じゃがいもとサザエと一緒に食べたことがなかったので、とても美味しかった。そして、翌日は西ノ島にある小中学校に訪問させていただいた。去年も訪れたので、今年で2回目である。小学校と中学校が同じ敷地内内にあり校舎も繋がっている。去年の9月ごろに出来たばかりなのでものすごく綺麗だ。2回目だけどまだまだ学校内の図がわからないので、学校探検をしたのは楽しかった。特に私が感動するのは体育館だ。体育館のつくりが面白い、なぜなら小学生と中学生の体育館が隣にあるのに同じ通路を使うことなく体育館まで行けるのはなかなか工夫されていると感じた。中学生との授業では大学生がなかなか居ない島で大学進学という進路もあると言うのを伝えるためだ。中学生からの質問を受けるとい形式だったため興味のある子とない子で分かれていたが興味のない子でも分かりやすいように話していくことが難しかった。先生からはシャイな子が多いと聞かされていたので、あまり話してもらえないと思っていたが、そんなことはなく授業以外の時間でも親しく話してくれた。なかなか、上手には伝えられなかったが真剣に

話してくれる中学生と向き合うことで純粹さを感じた。交流給食も美味しかった。何を食べたかは忘れてしまったが、バランスや味付けなど私がいつも食べることないものだったので尚更美味しく感じた。午後からも少し授業に参加した。たくさんの中学生と交流できたので楽しかった。午後からは、西ノ島にある社会福祉施設にお邪魔した。デイサービスや障害者自立支援、保育所、学童など様々なことをしているところだ。班に分かれてお話を聞いた。私の聞いたところは障害者自立支援だった。名前をシオンの園ございなである。この施設は就労継続支援 B 型でどんな障害を持っている人でも利用できる。就労継続支援 B 型とは障害者総合支援法(旧 障害者自立支援法)に基づく就労継続支援のための施設で、現地点で一般企業への就職が困難な障がいをもっている人に就労機会を提供するとともに、生産活動を通じて、その知識と能力の向上に必要な訓練などの障がい福祉サービスを供与することである。

B 型は雇用契約を結ばず、利用者が作業分のお金を工賃としてもらい、比較的自由に働ける"非雇用型"である。現在の利用者人数は 18 人で世代は祖父や祖母のような高齢者が多い。今の最高年齢は 74 才である。ございなではグループホームを利用している人もいてその人数は 11 人である。自宅から通っている人もいるが、交通公共機関が少ない西ノ島は 1 日にバスが 5 本とかなので時間に縛られてしまい思うような活動はできないとおっしゃっていた。この施設ができたきっかけが障害者の生活に対して危機感を持ったからである、初めは民家から始まった。利用者は 1 人介護者も 1 人という少ない人数で行ってきたが、平成 18 年の 10 月から自立支援法が出来てきちんと社会福祉法人という資格をとってシオンの園ございなが始まった。工賃としてお金を渡しているため。仕事も働けるときに働くということだ。なので、人によってもらうお金が違ってくる。働くだけでなく、イベントも行っているという。今ではなかなか時間がなく出来ないことも多いが、昔は旅行、忘年会、祭りなど様々なことをしている。また、知夫島の知夫村に出張所があり、手が足りないときにはございなから人を派遣して活動することもある。主な仕事は、役場の掃除、トイレの掃除、花壇の掃除、岩牡蠣のコレクター作り、草刈りなどである。島ならではのもので大変なこともある、それはメンバーが保健所に行ってしまいなかなか働かない、精神科の人がいなくなったため、質のいいサービスを提供することができない。また、職員不足も深刻で他の施設などにも行かないといけなくなってしまうのでどうしても重労働になってしまい、新しい人を雇いたいなかなか島という環境もあり職員の数は増えていないとおっしゃっていた。今一番困っていることは、利用者の高齢化が進んでいるので、若い利用者を受け入れることだ、しかし島全体の人数は決まっているのでなかなか難しいと言う。しかし、島ならではの支援の仕方もある。それは、地域密着型で地域の中で溶け込みながら支援できるということだ。地域みんなが家族だという意識を持っているので、包括的に支援できるのである。利用者の方も含めてお話しをしていただいたため。利用者さんと交流こともできた。障害の重度は人それぞれだがございなで活動することが生きがいと思っている人がたくさんいることが分

かった。さらに、利用者の一人が川柳を私たち一人ひとりにプレゼントしてくれた。福祉施設で実際に働いている方々にお話を聞いたのは今までの経験の中でなかったので貴重な経験になった。土曜日は年に一回開催されているキンニャモニャ祭りに参加した。この祭りでの魅力は生歌に合わせてながらキンニャモニャ踊りを踊るということだ。ただ踊るだけでなくしゃもじをもちながら踊るということだ。みんながオリジナルで踊っているところが多く終始和やかな雰囲気であった。屋台も出店していて高校生も汁なし担々麺を売っていた。とてもおいしかった。そして、夜の花火にはとても感動した。打ち上げ場所から近かったので、他では味わうことが出来ないものだ。とても感動した。翌日が最終日だった。無事遅れることなく島を出発することができ東京に帰ることが出来た。島前合宿では日常からかけ離れた場所での生活で慣れるまでに時間が掛かってしまうかもしれないと心配したが、みんな帰りにはまだこの島にいたいと言ってくれて企画をして本当に良かったと感じた。